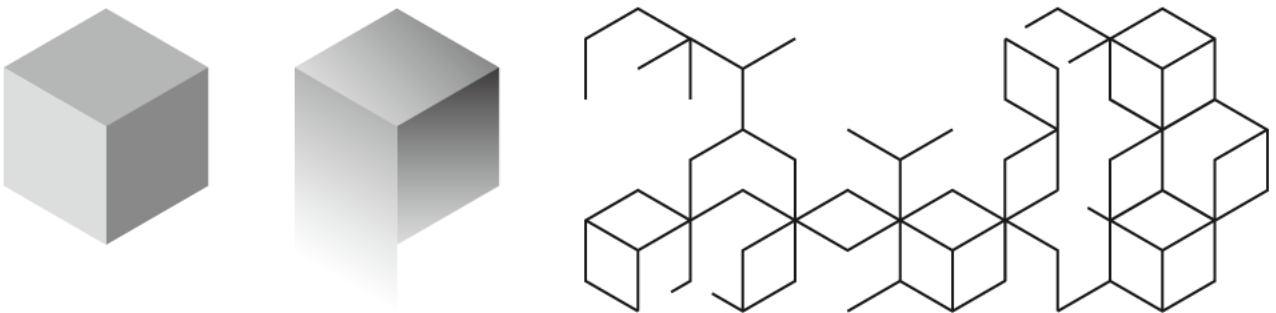


保存形式としての風景

日本の山に囲まれた風景、その中心が平野である場合、そこには田畑が広がり山裾には家屋が立ち並ぶ。山に囲まれた風景、その中心が湖であった場合、そこはダム湖となり山裾は道路になる。本作品に使った主な写真、それはダム湖の周りの山裾を、ぐるりと回りながら撮影したものです。ダム湖を回る撮影は、日が昇り沈むまで、逆光を避けつつ順光を追って、風景を撮影し続けることができる。これはダム湖周辺の風景がもつ、構造的な特徴であり、それを活用した撮影術だといえます。風景には地域固有の構造があるものです。

風景に構造があるように、イメージにも構造があります。絵画/写真/CG/等々、目に見えるもの、心に浮かぶもの、あらゆるイメージには構造があるのです。人によって見て取る構造が異なるものの、その見え方の違いは、絵作りのコツや個性と呼ばれます。私はダム湖で撮影した風景をコンビニの複写機で白黒コピーしました。拡大縮小、明暗濃度、コントラストを変えて、無茶苦茶にコピーして、ハサミでバラバラにします。バラバラの風景、その白と黒とをどの様に並べるのか、まるでオセロのように、イメージの構造を探し求めます。すると、これまで見たことも感じたこともないような世界へと辿り着くことがあります。(本作では「底の抜けた立体感を山積みにした構造」をイメージして、白と黒とを組み合わせています。概念図は左から、立体感、底の抜けた立体感、底の抜けた立体感を山積みにした構造、となります。)



遠くからだだと山水画に、近づくと写真にみえる。そんな本作は、差し詰め山水と写真とが連続した風景といえるでしょう。その連続性を生み出すもの。それは、山水と写真に共通する要素があり、私の築いたイメージの構造がそれらを連結させたのかもしれない。そもそも、私たちが目にする風景は、人が世代を超えて生活してきた場所であり、人や自然が幾百年にも渡って形成したものです。その悠久の時間が、山水から写真へと連なるイメージを風景に上書きしているのかもしれない。あるいは、私たちの生活を織り成す、目に見えるもの、心に浮かぶもの、それらの記憶を蓄積する保存形式として風景というものがあるのかもしれない。

2022.9.14 展覧会に寄せて
米倉大五郎